

11 神宮図花瓶 萬古陶磁器同業組合

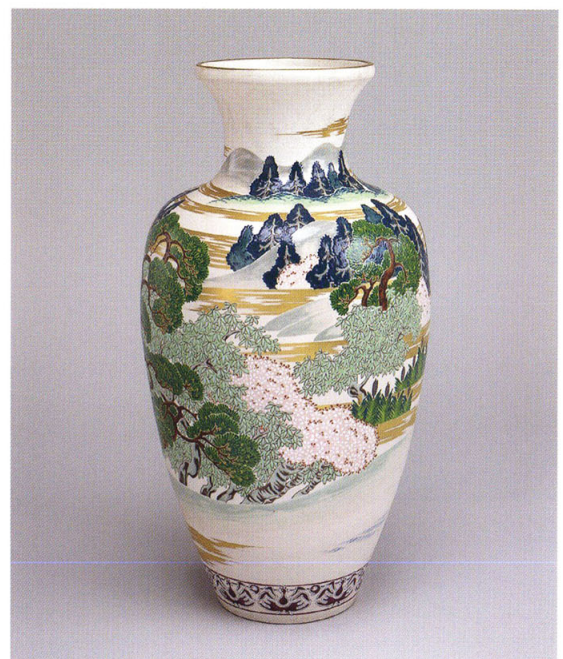
一対

昭和三年（一九二八）

陶磁

（右）径三一・三 高六〇・三

（左）径三一・八 高五九・五



（右）背面

萬古焼は江戸時代元文年間（一七三六～四一）に桑名の豪商沼波弄山が伊勢で開窯、一時衰退したものの十九世紀前半に森有節が再興し、その系統が各地に広まった。本作は萬古焼の特徴である厚めに塗られた上絵付けによって、伊勢神宮の外宮と内宮を一對の花瓶それぞれに描いた花瓶。素地は白萬古土と呼ばれる胎土の白さをそのままいかした素焼のような風合いで、祭祀に用いられる土器を連想させる清浄さを表す。図様は、縦長の構図に、花瓶の下の方から近景が描かれ、金彩による霞を織り交ぜながら上部に行くにしたがって遠景とし、左右に空間が展開して広がっていく画





(左) 背面

面構成となっている。色鮮やかな松や桜のほか内宮と外宮それぞれの社の屋根や橋など、具体的な景物を象徴する建築物の一部を描くことで、伊勢神宮の風景の全体像を暗示している。制作者の萬古陶磁器同業組合は、明治三十九年（一九〇六）に四日市市、三重郡、桑名郡の萬古焼関連製造業者が中心となって組織された組合で、本作の絵付けは四日市萬古の名工として知られる田中徳松が担当したと伝えられる。昭和三年（一九二八）の大札に際して三重県知事原田維織より献上された。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

## 寿ぎの品々を読み解く

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 75

編集 宮内庁三の丸尚蔵館  
制作 株式会社 東京美術  
翻訳 黒川廣子  
発行 宮内庁  
平成二十九年一月七日発行

© 2017, The Museum of the Imperial Collections, Sanmonnan Shozokan